

# “想いを米て”

米とともに生きてきたわが町。

今年もいろいろな想いが込められた田植え風景がありました。  
この想いが秋にはみんなを笑顔にしてくれることでしょう。

多古高校

## 日本の農業を支える人材を育てるために

4月26日、多古高校の3年生10人による田植えが行われました。これは、カリキュラムの見直しに基づく新たな取り組みで、「作物・野菜・草花」の3分野の選択コースを新設し、2週間ごとに各コースで実習授業を行うというものです。生産流通科萩原学科長は、「様々な生産・収穫体験を通じて、少しでも生徒たちに農業に対する興味が芽生え、深刻化する後継者問題の解消につなげることが目的」と話します。

田植えを行った生徒たちのうち、家でコメを作っているのは半分の5人。そのうち4人は兼業農家ですが、作業に携わっているのは祖父母。残り1人（石井克典君 匝瑳市）は、22ヘクタールを付ける稲作専業農家。卒業後は農家を継ぐと決めており、将来はさらに作付面



この4月から新たに導入された田植え機を運転する石井君

積を増やしたいと真剣な眼差しで抱負を話しました。  
生徒が植えたコメは「多古高校米」として、イベントで活用するなど、高校のPRに役立てる予定です。



青山祐太さん田植えイベント

## 生まれ育ったふるさと多古町をPR

5月3日、多古町出身の演歌歌手「青山祐太」さんと、ファンクラブや地元住民らによる田植えが町内の田んぼで行われました。青山さんは、多古町をもっと多くの方に知ってもらいたいという想いで、食味日本一に輝いたことのある多古米の田植えイベントを企画したとのこと。県内外からのファンや地元の方々など総勢約50名が集まり、すべて手作業で植えました。参加した横浜市の中学生は、実際の田んぼで植えるのは初めてだと悪戦苦闘していました。



JAF・ANA田米

## 田植えで多古の魅力満喫！

5月11日、豊饒のさと多古ふれあい事業実行委員会の主催による第9回「都市と農村との交流事業」が、日本自動車連盟（JAF）の会員を対象に島地区で開催されました。小雨が降るあいにくの天候となりましたが、都内や埼玉県などから約100名が参加し、初めての田んぼの感触に、大人から子どもまで驚きの声を上げていました。昼食に用意された、多古米おにぎりや豚汁、野菜の天ぷらなど、多古の味を堪能した皆さんは、ハウレンソウの収穫も体験しました。都内から参加した家族連れは、「成田空港より先にはなかなか行ったことはなかった。このような自然がいっぱいの多古町は素晴らしいところ」と話していました。



翌日には、ANAグループ社員による「ANA田米（多古米）田植祭」を開催。前日とは打って変わって青空。今回4回目となる田植祭には、初めてという方や3回目のベテランなど、約70人が参加し、泥んこになりながら大いにぎわいました。



小学校の総合学習

## 体験してはじめてわかる米作りの大切さ

町内の各小学校では、総合学習の授業として田植えが行われています。今回は、第一小学校と第二小学校にお邪魔しました。第一小は5年生、第二小は4・5年生。児童たちの悲鳴？ 歓喜？ が飛び交う中、保護者や地域の方々の指導のもと行われました。稲の生育や自然の大切さに

ついでの説明の後、安全のため靴下を履いた子どもたちは、恐る恐る田んぼに足を踏み入れ、最初はおぼつかない手つきで植えていきましたが、終わるころにはコツをつかんで、上手にスイスイと植える子どももいました。9月には、美味しい多古米を食べることができそうです。

